

## 平成23年度教職大学院派遣研修研究報告書

研修生番号	管23K03	氏名	野澤 一代
研究主題 —副主題—	通常学級における一人一人を大切にする教育的支援 ～認知と学習スタイルの多様性を踏まえて～		
所属校	荒川区立尾久第六小学校	派遣先	創価大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>昨年度まで、3名の特別な支援を必要とする児童を担当した。3名とも、異なる発達障害を抱えながらも、入学時より通常の学級で生活してきた。私は、これらの児童と共に生活するのに、特別支援教育の専門的な知識や指導方法をもち合わせていたわけではない。30余名の児童の中の一人として、指導してきた。振り返ると、様々な課題や困難があった。私に、特別支援教育に関する知識がもう少しあったら、このような学習の時はこのように指導を、という指導方法をもっていれば、よりよい方法で切り抜けられたことも多かつたであろう。しかし、学級集団を育てていくことに関しては、特別な支援を必要とする児童がいるからという垣根は一切なかった。彼らがいたからこそ、互いに気持ちの優しい、相手を考えることができる学級を作ることができたのではないかと自負している。</p> <p>通常の学級では、障害の有無に関係なく学校生活で苦労している子が少なくない。特別支援教育の視点で児童たち一人一人をとらえ直すことによってこれまで気付かなかつた学級に在籍する児童たちのニーズが浮かび上がるのではないか。そして、個々の児童の多様性を踏まえた学習や環境を考え、工夫すること等を通常の学級の標準装備とすることができたら、それこそが一人一人を大切にする教育になる。</p> <p>そこで、児童の様子を振り返り、分析することから始め、そこから学級の中の児童全てが参加できる授業、居心地の良い学級環境等を考えた。</p>
II 研究の方法	<p>①児童の分析～ICFの活用</p> <p>②現任校での実践や過去の自分の実践の振り返り</p> <p>③MI理論等に基づいた授業設計</p>
III 研究の結果	<p>ICFを参考にすることによって、対象児のニーズに応じた支援に役立つ方法を見だし、児童の困り感を浮き彫りにすることができた。</p> <p>例えば、LDのある児童が、通常の学級でうまく学べないのは、その児童が「LDだから」ではなく、その児童にふさわしい環境が用意されていなかったからである。すなわち、通常の学級で実践的に求められているのは、障害の有無の問題ではなく、児童の学習上、生活上の「困っていること」に目を向け、授業や生活環境を工夫し、児童の学びを支援するということである。</p> <p>前述で書いた児童Aを分析することで、困り感が「算数が分からない。」「国語の心情表象が文字では理解できない。」ことが分かった。児童Cは、「友達とどうコミュニケーションをとったらいいか分からない。」ことが分かった。そこから、児童の学習への支援の手立てを考えた。</p>

#### IV 考察

MI理論を活用した学習方法のアイデアを通して、大切にしていかなければいけないことは、以下の4点である。

**①児童たちは8つの知能に応じた方法をすべて試すことで、自分のもっとも得意な方法を探ることができる。**

自分の得意なところはどこなのか、自分はどの知能を活用すると学習が成立するのかわかることは、発達障害があってもあらかじめ学習を成立させることができるのである。そして、この学習は、慣れてくれば自分でその知能に合った方法を考えることができる。

**②教師はその児童が最も得意だと思われる活動に対して評価し、児童も評価されたい学習方法を自ら教師に指定することができる。**

従来の学習では、教師が考えていた学習方法のみで授業が行われ、それを不得意とする児童は低い評価しかつけられなかった。しかし、学習方法を多様化することによって、児童は自分の得意な方法で学んだことを教師に評価してもらえるのである。

このことによって、前述の児童Aは国語の既習の文学的文章や説明的文章の総括的評価では毎回、満点近くをとることができた。

**③特定の能力に限界があつてある目的を達成できない児童に、より発達している他の能力を代用させることによってその目的を達成することができる。**

前述の児童Aは、文章を読んで書いてまとめることは全くできないが、文章を一度絵に描くことはできた。「視覚・空間的知能」が高いことが分かったので、挿絵を見たり、絵本や紙芝居でまとめたり等に学習を切り替えることで、国語の目標が達成された。

**④教師も自分の「得意な知能」に気づき、授業を考えるべきである。**

教師が授業を考える際にも自分の「得意な知能」を使っている。「音楽・リズム的知能」が高い教師は学習に「音」を使う。「身体・運動的知能」が高い教師は、活動中心な授業を構成することが多い。すなわち、教師自身も自分の「知能」について知ることによって、偏って学習を構成することを防ぐことができる。そして、教師の「不得意な知能」を授業研究する中で高くすることも可能である。

以上のことから、この方法による授業設計により、学級の一人一人を大切にできる教育が可能となることが示唆された。